

第31回 戦争体験を語り継ぐ集い

＜第26集＞戦時体験記録集

二度と戦争を繰り返さないため

大切な人の命を守るため

戦争中に 何が起こっていたのかを 知ってください



戦争になると 人が人ではなくなります 命が命ではなくなります

第31回『戦争体験を語り継ぐ集い』プログラム

令和元年7月27日（土）10～12時

すいとん試食会 12時～

1. ご挨拶
2. 緑生涯学習センター中村館長より
3. 語り継ぎタイム（1）
 - ・室生昇さま （P1）
 - ・小島久志さま （P3）

休憩（戦中戦後の食糧試食）

4. 語り継ぎタイム（2）
 - ・橋本辰夫さま （P4）
5. すいとん試食会

はじめに

◇「戦争体験を語り継ぐ集い」とは

名古屋市緑生涯学習センター主催の事業で、進行は「戦争体験を語り継ぐ会」が担当しています。行政と市民が協働した取り組みを続けています。

戦争を知らない、のちの世の人たちのために、戦争が始まった時の現実はどうだったのか、戦時下での暮らし、軍隊生活の実際、危険と隣り合わせの毎日を過ごさなくてはならない、厳しい現実になることを、伝えています。戦争の悲惨さを伝えることで、平和と平和を守る大切さを、考えていただける機会にさせていただくことを願っております。また、体験者ご自身に直接語っていただくことの重みを大切にしています。命の大切さ、平和のありがたさへ思いを馳せる機会になることを願いながら、毎年開催しています。

この冊子を手にとってくださる皆様からも、平和への祈りが広がりますように。

◇戦時体験記録集について

体験として語られる言葉を記録として残す大切さがあります。語り継ぎタイムで話される言葉は、生き生きとして心深くに響いてきます。けれども、その場にいる人にしか伝わらず、耳から聞いたことは、いずれ消えていく運命にあります。こうして文字にすることにより、集いに参加できない人たちへ、後からの人たちが読み返すことができるように、読み継いでいただけるように、願いを込めて作成しています。

◇冊子「飛翔」について

「飛翔」は年4回発行され、戦中戦後の様子が多く書かれています。私たちと共通する思いが綴られている文章を、関係者のお許しを得て掲載しております。

今年も「戦争のない平和な世界を！」との熱い思いと、賛同していただいた皆さまのご協力により、戦時体験記録集が完成いたしました。感謝申し上げます。

戦争体験を語り継ぐ会 一同

戦時体験記録集＜第26集＞

◆目 次◆

語り部さん

戦前の無産者医療運動に学ぶ（室生昇） - - - - - P1

軍国少年（小島久志） - - - - - P3

子どもたちも兵器づくりに加わった。70年前、緑区で
緑区と戦争3：日付のある緑区の空襲＜発掘＞（橋本辰夫） - - - P4

戦時体験記録

「早く逃げなさい」
「ごめんなさいお母さん」（沢田昭二） - - - - - P7

戦時の女学生生活（鈴木定江） - - - - - P11

満州のこと（紺田静子） - - - - - P13

富山大空襲について（上田英二） - - - - - P14

飛翔より

私の昭和は・・・その1・その2（夏梅誠一） - - - - - P15

故橋詰四郎さん追悼に寄せて

橋詰四郎さんと私のこと（水野晴仁） - - - - - P19

橋詰四郎さんは平成の時代30年間を「戦争体験を語り継ぐ集い」を支え続けてこられた方です。哀悼の意を込めて活動の一端をご紹介します。

* 語り部さん *

戦前の無産者医療運動に学ぶ

室生 昇

戦前の我が国の医療保障は極めて貧弱で、一部大企業に組合保険があるのみで、殆どの国民は無保険状態であった。

農村から織物工場等に女工として働きに出ていた女性が肺結核に罹患して帰農したため、農村に結核が蔓延し、青年男子に罹患するものが多く、兵役不適格者が増えた。驚いた政府は、農村に国民健康保険制度を1938年（昭和13）に実施し、医療費の一部を保険給付したが、それ以前は無保険状態で一般の勤労市民は医師にかかることが極めて困難であった。

1933年（昭和8）、名古屋医科大学（現名古屋大学医学部）を卒業した富山出身の青年医師、青木文次氏は新興医師連盟（プロレタリア文化同盟の一翼）に参加され、大学卒業と同時に労働者の要請で、南区波寄町（名鉄旧金山橋駅、愛知労働会館の近く）に名古屋無産者中央医院の活動に、同級生の広島出身の米沢進先生と共に参画された。（1933年8月1日開院）

青木先生は翌1934年（昭和15）1月金沢連隊に徴兵されるまで、労働者也、貧困者の医療に身を投ぜられ、遠くは稲沢まで自転車で往診されることもあった。先生の入隊が近づくと「我々貧乏人にとって青木先生は神様みたいな人だから」と兵役免除の嘆願が行われた。嘆願書には沢山の署名をそえて、金沢連隊に提出されたが、当時の天皇制軍国主義のもとではその効果もなく、更に先生は入隊後旬日を出ずして、捕捉、拘禁され、軍法会議にかけられた。入隊まで大衆医療運動に挺身されたこと、侵略戦争に反対し、入隊後も自らの信念を堅持されていたことが、軍法会議にかけられた理由であった。その結果、治安維持法違反として医師免許を剥奪され、5年の禁固刑に処せられ、陸軍刑務所に収監された。日中戦争勃発と共に獄中から「星なしの一兵卒として、中国大陆に送られ、1938年（昭和13）9月10日、武漢戦線で負傷兵の救護中、頸部貫通銃創を受けられ、同27日、惜しくも、若くして31歳の生涯を閉じられた。

無産者診療所は実費診療を行っていたが、米沢先生は診療所の医師として、保険医の申請をした。しかし、それが承認されなかったため、この不当を訴える講演会を開いた。開会の挨拶中に「弁士中止」「解散」と臨検の警官が云うと同時に主だった人々を検束した。その夜は釈放されたが、2月に入って未明5時頃、特高警察は診療所を襲って米沢医師、看護婦、書記の3人を検束した。当時1歳を迎えた米沢先生の長女が消化器疾患で危篤状態となり、先生は釈放されたが、不幸にも子どもさんは他界された。特高は「天皇の特高」と何かと言えば口に出した。働く人々のための人道主義的な医療活動までも治安維持法で弾圧した。その後、先生は40歳に近いのに召集され、フィリピンに送られた。出征中、奥さまと末のお嬢さんは、広島原爆で亡くなった。

先人の活動に学び、平和憲法を守りましょう。



小島 久志

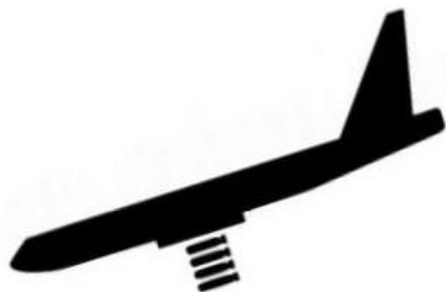
私、小島久志は 満州国建国宣言の 1932（昭和 7）年に名古屋市東区で生まれ、アジア太平洋戦争が終わった 1945（昭和 20）年には、中学 1 年生で、まさに「軍国少年」でした。

1937（昭和 12）年、盧溝橋事件から日中全面戦争にのめりこみ、「治安維持法」による言論統制、「国家総動員法」で国民精神総動員運動が展開された。

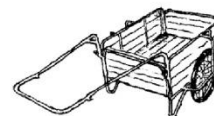
一般住民の生活も、物資の統制・配給・若者の徴兵（軍隊へ引っ張りこむ）・労働者の徴用（軍需工場で強制的に働かせる）・金属製品の供出・・・で戦時体制に組み込まれていきました。子どもたちにも、日増しに戦争下の厳しさがのしかかり、緊張を強いられました。

“とんとんとんからりと隣組／格子を開ければ顔なじみ／回してちょうだい回覧／教えられたり教えたり”——隣組は 1940（昭和 15）年、国家方針の徹底・違反の摘発を視野に、10 世帯程で構成されました。月 1 回の常会、戦時国債の割り当て、食料の配給、防空演習の指導などで日常生活に密着した存在でした。

“拳国一致”“一億一心”——のかけ声から「贅沢は敵だ」「欲しがりません勝つまでは」「足らぬ足らぬは工夫が足らぬ」——の張り紙が街にあふれていました。



子どもたちも兵器づくりに加わった。70 年前、緑区で
橋本辰生



この夏、3 枚の写真に出会った。戦争中だった 70 年前のものである。最初は鳴海小学校に残されていた写真 (A) と (B)。同小学校の子どもたちが天白川で砂を採り、リヤカー（図 D）に積んで兵器の部品をつくらせている鳴海製陶に運んだ、というのだ。

この写真を見たひとりが、学徒動員という話はあるけれど小学生ではないか、と驚いた。私はこざかしくも、ほかでもあったことだ、と応じた。しかし、問題の本質は、あのころ、子どもたちのほとんどが学校で学ぶ時間を奪われていたということだろう。

思い直して少し調べてみた。まずは鳴海小学校という名称。明治以来の尋常小学校という呼称は昭和 16（1941）年、国民学校となって戦時色を強めていた。

そして、昭和 19 年 3 月閣議決定の「決戦非常措置要綱二基く学徒動員実施要綱」にはこうあった。「国民学校高等科児童ノ動員ニ付テハ土地ノ情况、心身ノ発達ヲ考慮シ適當ナル作業種目ヲ選ビ之ヲ実施ス」

だとすれば写真の撮影は、昭和 19 年か、同 20 年ということだ。

おりもおり、写真に写されている砂の採取、そして運搬に参加していたという人にお会いすることができた。そのコトバの一端はこうだ。

- ・リヤカーは 2 人で引けといわれたがとても重くて引けなかった
- ・後ろから押す者、疲れると交代する要員がグループになって運んだ
- ・長い坂道、夏だった
- ・いまの古鳴海の交差点からアビタの西側を通り伝治山交差点の方に進んだ
- ・なにがしかの報奨金が出るということで、楽しみにしていたが、出なかった

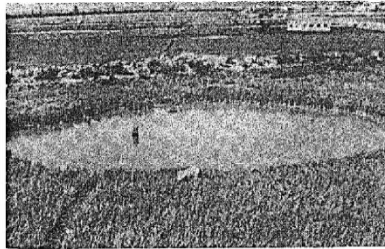
ところで、残る 1 枚の写真 (C) は鳴海製陶に残されていたもので、当時の工場棟の外観である。空襲回避のための迷彩が施されている。

鳴海製陶といえば、もとは明治時代の帝国製陶所からはじまった高級洋食器メーカーではないか。しかし、社史等によれば昭和 18 年、別の会社に売却され、その会社が兵器の部品を铸造等で作っていたのだった。戦争となれば、産業もまた軍事一色に染められていく。

* 酒井隆弘さん、堀崎嘉明さんとの調べに依拠しました（橋本）

緑区と戦争 3：日付のある緑区の空襲〈発掘〉

橋本辰生



▲ 爆弾でできた穴—今の下水処理場ふきん(毎日新聞社提供)
鳴海小学校「鳴海」(1973、創立 100 周年)の一部



1945.4.6、日本陸軍撮影の鳴海の一部：国土地理院

知っているよ、という人が少なくないであろう二つの画像。上の左側は水田に落ちた爆弾の穴のクローズアップ。右側の画像の左半分を占める水田のひろがりには黒いポツポツが写っている。爆弾の穴だ。いずれもいまの浦里である。

ところでこれらの穴はどう推移したのか。

戦後の空中写真は米軍が撮影していて、見たことがある。あらためて国土地理院の hp で、1947（昭和 22）年 9 月 6 日撮影の写真を見た。

新しい穴ができていた。しかし、全体の穴の数はかなり減っている。先人たちは空襲の恐怖、敗戦の虚脱感にくじけることなく水田の復旧にはげんでいた、と想像した。

緑区の空襲記録について、あらためて調べた。その結果をとりあえず右頁の一覧表のようにまとめた。

そこでの基本的な前提は、次の 3 種類の情報を重ねてみることであった。

第 1 として、全市の状況との関連を把握するために「新修名古屋市史」第六巻中の空襲一覧と本文記事を基礎とし、緑区に関するデータを抽出した。

第 2 に全県下を対象とする最新かつ詳細なデータ集である「戦時下・愛知の諸記録 2015」から同様のデータを取り出した。

第 3 には、当然のことながら緑区の旧町誌、校誌など地域の資料を可能な限りチェックした。

なお、一覧表に記載するにあたっては、日付のあるデータに限ることとした。

こうして見てきたとき、緑区にかかわる空襲は 16 回あった。ただし、「愛知郡」としか記されていないものが 2 回あって、今後の検証を要する。しかしながら、会報第 88 号の拙稿「区誌、校誌に記された空襲」では 7 回だった。埋もれている空襲がまだあったのだ。ちなみに全市レベルにおける空襲の全回数は「新修名古屋市史」第六巻の集計では 63 回だった。

この名古屋空襲の要約は、「ピースあいちブックレット No.1」（2012）によれば、こうだ。

愛知は飛行機産業のメッカだった

その先に名古屋空襲があった

事実、三菱航空機などの工場を目標とした名古屋空襲は、ほどなく密集市街地を目標とした。そして、そのそれぞれと緑区は無縁ではなかった。

このたび浮かび上がってきた空襲の一つ、1945 年 6 月 26 日の「鳴海」について、隣接する天白区の記録をひもとくと、その一端がうかがえた。

まず「天白村誌」（1956）は、この日の野並について「大型爆弾数十発落下により半壊住家三、爆死小児一の被害」だという。次に、天白中学校「校誌 天白」（1998）には「菅田のお年寄り」のコトバとして、爆弾は「野並の南の鳴海製陶の工場が戦争中は住友の軍需工場だったので、そこをアメリカ軍が爆撃したときに落とされたのではない。子どもが一人死んでいる」とあった。

* 酒井隆弘さん、堀崎嘉明さんとともに調べました(橋本)

表：名古屋空襲と日付けのある緑区の空襲一覧

(緑区)	新修名古屋市史(第六巻)								戦時下・愛知の諸記録 2015	旧町誌・校誌など
	回数	年月日	時刻	来襲機数	爆弾 t 数	爆撃目標・被害区(戦後合併)	死者	負傷者	被害戸数	
1	2	1944 12/13	13:50	71	186	三菱発動機大幸千種・東・北・中村(守山町・猪高村)	330	256		鳴海 大高
2	4	12/18	13:00	63	161	三菱航空機大江港・西・瑞穂・南(鳴海町・天白村等) *本文 P.862 に 鳴海町	334	207	323	「鳴海町案内」 「片平」
3	5	12/22	13:50	48	123	三菱発動機大幸東・熱田(守山町・鳴海町・天白村等)	0	3	3	「片平」
4	12	1945 01/08	22:03	1		昭和・中・熱田・中川	1	2	18	(愛知郡)
5	14	01/09	01:20	1		(鳴海町)				(愛知郡)
6	15	01/09	05:15	1		(鳴海町)	0	0	0	鳴海
7	17	01/14	14:50	40	99	三菱航空機大江熱田・中川・港・南	94	98	194	鳴海 有松
8	24	01/23	14:50	28 27	166	三菱発動機大幸市街地中心部、市街地北部 全市(守山町等)	125	61	297	(愛知郡)
9	28	02/10	01:59	1		(鳴海町)	0	0	0	鳴海
10	31	02/15	14:00	33	105	三菱発動機大幸千種・東・熱田・南・中村(守山町) *本文 P.868 に 鳴海町	61	52	709	
11	34	03/03	00:10	5		港・南(南陽村)	0	1	1	鳴海
12	42	03/19	02:00	291	1,858	市街地中心部 全市(市外)	826	2,728	39,893	鳴海
13	43	03/24 ~25	23:56	223	1,545	三菱発動機大幸千種・東(市外)	1,617	770	7,066	鳴海
14	50	05/17	02:10	457	3,609	市街地南部 全市(山田村・楠村・有松町・鳴海町等) *本文 P.891 に 鳴海町	505	1,300	23,695	大高 有松
15	56	06/26	08:30	137	829	市内 5 工場 全市(南陽村)	426	327	4,016	鳴海
16	59	07/15	12:35	約 100		艦載機の機銃掃射	6	20	6	鳴海
参考：全市合計(63 回)				2,579	14,520		7,856	23,695	135,416	

■付記：

- この表は、「新修名古屋市史」第六巻(2000(平成 12)年 3 月 31 日、名古屋市発行)を基礎とし、2 以下のデータを加えた。
- 「戦時下・愛知の諸記録 2015」は、2015 年 8 月 15 日、あいち・平和のための戦争展実行委員会発行のデータ集。このデータ集の列中、「(愛知郡)」を記載したのは、当時の愛知郡が鳴海町および天白村・日進村・東郷村・豊明村など 1 町 8 村で構成されていたため。ちなみに有松、大高は当時、知多郡に属していた。
- 「旧町誌、校誌など」の列中、各欄の資料の詳細は次のとおり。
「鳴海町案内」(1959 年 10 月 8 日、鳴海町・鳴海町史編纂委員会)／「大高町誌」(1965 年 3 月 20 日、大高町誌編纂委員会・大高町)／「鳴海」(1973 年 10 月 15 日、鳴海小学校、創立 100 周年記念)／「有松」(1974 年 10 月 20 日、有松小学校、創立 100 周年記念)／「片平」(1995 年 11 月 1 日、片平小学校、創立 25 周年記念)。なお、「有松町史」(1956 年 3 月 30 日、有松町史編纂委員会)に空襲の記述はなかった。「鳴海町案内」中、日付が誤記と思われる空襲 1 件は割愛した。

＊戦時体験記録集＊

「早く逃げなさい」

「ごめんなさい、お母さん」

沢田 昭二

広島で原爆にあった時の話をします。

その時、私は中学校 2 年生でした。中学生でも、もう戦争のために工場などへ動員されて仕事をしていました。私は工場で機関銃の弾を作る訓練を受けていました。

前の日、食事で大豆をボリボリと食べていましたが、お腹をこわしてしまいました。そのため、翌日は工場を休んで、家で寝ていました。

寝ていたから何がおこったのか分からないのだけれど、気が付いたら壊れた家の下敷きになっていました。普通、地震だと揺れているときに、外へ逃げることもできるのだけれど、あっという間の出来事だったので。

広島では原爆のことを「ピカドン」と言います。何故かといいますと、最初にピカッと光り、光と一緒に熱がやってくるからです。広島の街がその熱で火がつかしました。その後、「ドン」というすごい爆風がやってきたのです。鉄筋コンクリートのビルも壊れるほどのすごい風がきたのです。広島はペシャンコになってしまいました。

私は「ピカ」も「ドン」も知らないのです。家の下敷きになっていたのだから。

それで、もがいているうちに隙間ができて、やっと外に這い出すことができました。外を見ると真っ暗闇でした。朝の 8 時 15 分に原爆が落ちたのですから、明るいはすなのに真っ暗闇でした。広島中がペシャンコになったのです。物すごい土ほこりがたち、それが舞い上がって、太陽の光をさえぎり、暗闇になったわけです。始めはこげ茶色に見えたのが、だんだん茶色、そして白っぽくなり、広島全体が見えるようになってきました。

住んでいるところは家がびっしり建っていて、2 階に上がってもよその家の屋根しか見えないところでしたが、見渡すかぎりペシャンコにな

った広島が見えたのです。

それでこんな大きな街が被害を受けたのは、きっと地震が起きたのだと思ったのです。原子爆弾だとは夢にも思いません。大きな爆弾だって、広島をペシャンコにするなんて想像もつきませんでしたから、大きな地震に違いないと思ったのです。

そう思っている時に、足元から私の名前を呼ぶお母さんの声が聞こえました。私の名前「昭二、昭二」と呼ぶ声が。声ははっきりはしていますが、すごく遠くから聞こえてくるのです。壊れた屋根や柱や壁などの隙間をすり抜けて。私の耳に届いたのです。それで、お母さんといろいろな話をしました。

「これは大きな爆弾だ。家の近くに落ちたんだ」と言いました。

でも、原爆に遭った人達は、自分の近くに落ちたんだと思っているのです。たった 1 発の爆弾が、広島の上空 580 メートルで爆発し、広島を全滅させたのですから、私のお母さんも大きな爆弾だと思って私に教えてくれたのです。

それから、上に乗っている柱などを取り除けようと一生懸命になりましたが、動かすことができません。逃げてくる人に、「お母さんが下にいますので、助けて下さい」と頼みました。手伝ってくれるのですが、結局だめで逃げていってしまいました。

始め気づけなかったのですが、「ピカッ」と光った時に、火がついてしまったのです。しばらくくすぶっていましたが、やがて、燃え始めると、炎が次第に広がってきました。

それをお母さんに言うと、「すぐ逃げろ」と言うに決まっているので、始めは言わなかったのですが、だんだん火の手が強くなってきたので、ついにお母さんに言いました。

「おまえだけは助かって、早く逃げない」と、言ったのです。

一生懸命助けようといろいろなことをやってみたのですが、火が近くまで迫ってきました。お母さんは非常に怒るような口調で、「今すぐ逃げなさい、おまえは生き残って、しっかり勉強してりっぱな人間になさい」と一生懸命私を説得しました。

火事あらしというぐらい火が強くなってきたので、これは仕方がないと思い、最後に「ごめんなさい、お母さん」と言って、そこを逃げました。

3 日後そこへ行ってみました。お母さんがいたであろう場所焼け跡を掘ってみました。まだ底のほうは火が残っていました。私はお母さんの骨を骨壺に入れて、持って帰りました。

私は今物理の勉強をしています。物理の原理を使うと、小さな原爆でも爆発すると、一瞬に広島のような大きな街を焼け野原にしまいます。また、熱線による火傷で、ケロイドみたいになってしまうのです。

でも、もっと恐ろしいのは放射能です。火傷をしていない、怪我もしていないと安心している人たちに、1週間すぎた頃から、髪の毛が抜ける、歯茎から血が出る、皮膚の表面に斑点が出るなどの症状が現れます。放射線による原爆症で、苦しんで苦しんで、1ヶ月くらい後に多くの方が亡くなっています。特に高齢者よりも、若い人、子ども、お腹の子どもに影響が強く、今でもいろいろな形で続いています。また、ガンにもなりやすいと言われています。

21 世紀に大人になっていく皆さんに、この恐ろしい体験を伝え、世界中で戦争や核兵器をなくそうと取り組んでいます。

このお話しは、平成9年7月19日に開催した「第9回戦争体験を語り継ぐ集い」で沢田さんが語られた内容です。

その後、このお話しをもとに、実行委員会の皆さんと住民の協力により、次ページの歌「ごめんなさい、お母さん」が創られました。

戦争の悲惨さ、平和の大切さ、命の尊さを考えながら、広く皆さんに歌い続けられていくことを願っています。



戦争体験の歌

作詞「戦争体験を語り継ぐ会」

《ごめんなさいお母さん》 作曲 坂手 尚子



1 げん ば く が お ち て
2 あ か い — お ほ の と お
3 か あ さん の お こ と ば

ち い ろ の あ ら し の な か
わ が や れ が も い え の も え と ば

か か あ さん は い つ た
か わ あ た し は い き ぶ る

は や く に げ よ と —
つ や く に ぎ よ と —
せ か い の と も と —

三

母さんの言葉
忘れないあの言葉
私は生きる
世界の友と
科学の力を
平和のために
語り継ごうよ
生き続けよう

二

赤い炎
我が家が燃える燃え
母さんが叫ぶ
強く生きよと
親子を引き裂く
悲しい戦争
語り継ごうよ
生き続けよう



お や こ を ひ き さ く
2 お や こ を ひ き さ く
3 お や こ を ひ き さ く

1~3同じ か た り つ ご う よ

1~3同じ い き つ づ け よ う

一

ごめんなさい
お母さん
子どもたちと
歌いたいうた・歌詞
原爆が落ちて
茶色の嵐の中
母さんは言つた
早く逃げよと
親子を引き裂
一瞬の雲
語り継ごうよ
生き続けよう

戦時の女学生生活

鈴木 定江

昭和 19 年春、あこがれの市立第二高女に入学した。白い上衿のセーラー、白線が裾に 1 本入ったスカート。でもこの制服も長くは着てられず、2 学期頃から学徒動員で、熱田区船方にあった愛知航空機で兵器増産に携わる。国防色（黄土色）の上下を支給され、左腕には勤労学徒の腕章と、黒字に梅・桜を黄色の糸で縫い取りをした、今ならさしめワッペンの校章をつけ、防空頭巾と救急袋を肩から交叉させ工場へ行った。救急袋の中身は非常食として、生のさつまいもを細切りにし乾燥して煎ったものや炒り豆（大豆）など。

支那事変、大東亜戦争（太平洋戦争）と幼い時から戦争の中を育ってきた私達は、何の疑いもなく、お国のために、戦地の兵隊さんのために、銃後は私達の手で、と一途に頑張ってきた。しかし同じ年の 12 月 7 日の東海地方を襲った大地震で工場内の地面はコンクリートが割れて、作業不能な状態に陥った。止むをえず作業場を学校に移し作業を続けた。いわゆる学校工場である。

日増しに戦況は悪化し、空襲は昼夜を問わず頻繁にあり、夜など防空壕に避難する回数が多いので、寝巻に着替えなどせず、そのまま過ごすようになる。油脂焼夷弾の攻撃を受けた時など、あちこちで炎がメラメラと上がり、母も私も祖母も全員、火叩きを持って消火に走り回った。

3 月の大空襲の時だった。夜空が火の手で真赤に染まり、その中で B29（アメリカの爆撃機）が低空をゆうゆうと飛んで行く。この光景は一生私の眼から消え去ることはない。この時学校も焼けた。ひょっとしたら学校はたすかっているかもしれない、と翌日友と 2 人で学校まで、市電の軌道上を歩いていった。

校舎は跡形もなく焼けおちていた。

学校が焼失して私は、石川県へ疎開した。級友たちは、鷹来の工廠へと配属先が変わり、親元を離れて寮生活をした。

疎開先は石川県内の母方の従兄弟の家の新築の納屋で、土間に筵をして家族 5 人で暮らす。ひどい住家だが、空襲が無く、ぐっすりと眠れるだけでもありがたかった。着いた翌日から借りた畑でじゃがいもの作付けをした。自分達の食糧は自分達で作らなければ誰も売ってはくれないからだ。丁度春先で山へ入れば、わらび、ぜんまい、のびるなど山菜が採れ、どれ程胃袋をみたしてくれたか。

学校は疎開生として羽咋の高女に転入した。家から 1 里の道を歩き七尾線の高松駅から汽車で羽咋まで、そして学校へ。学校では半日が勉強、半日は農作業などだった。疎開生は東京や大阪からがほとんどで、名古屋からは 2 人だけだった。名古屋は工場動員が他地区より早かったようで、それだけ勉強は遅れていて、授業についていけず悔しかった。又、何かにつけて疎開生は先生に怒鳴られたりもした。

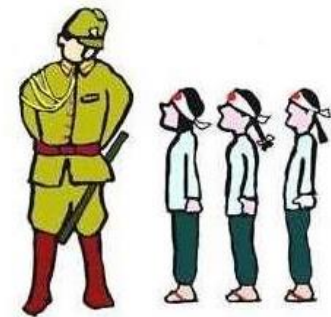
その頃母は、石川と名古屋を何度も往復し両方の暮らしを守るのに懸命だった。あの昭和 20 年 6 月 7 日熱田の大空襲の時も、名古屋の家にいたが、幸いにも難をのがれ、父も防衛召集で白鳥橋の辺りを自転車で通行中だったが無事だった。

戦争が終わって名古屋に戻り、母校に復学出来たのは 20 年の 11 月頃だったか。学校は 2 年生の 2 学期になっていた。

以後、戦後の苦しい日々を送ることになるが、どんなにお腹が空いても、着る物がなく、継ぎはぎでも、家族が揃って食事を囲み、ゆっくり眠ることが出来るのが無上の喜びだった。

平和のありがたさを、この時ほど痛切に感じたことは後にも先にもない。

いま振り返って悲しく思うのは、そんな忘れるはずもない戦争、戦後の体験の記憶が年とともに自分の中で薄れていくことだ。もっと辛い思い出が山程あったはずなのに、それが思い出せない。



満洲のこと

紺田 静子

私は昭和14年生まれで、今年78歳になります。満洲のハルピンで生まれました。父は軍人で、母は結婚と同時に広島からハルピンに嫁ぎ、私を産んで、2か月後に亡くなりました。

その後、広島から2番目の母が来て7歳まで父と母と暮らしていました。終戦の年の8月9日にソ連兵がせめてくるということで、母と私は日本に帰ることになりました。

ソ連兵がおそいかかってくる、弾丸が飛びかう中新京までは、ギューギュー詰め列車。新京から上海まで川の中を胸までつかり歩いて、月明りで夜に歩きました。コーリャン（牛のえさ）一杯が食事でした。

上海からハルピンまでは北海道から九州までぐらあります。

そんな中、ソ連兵に殺されたり、歩けなくて亡くなったり、中国人に預けられたり、多くの人が亡くなりました。

私も骨と皮になりながら、何ヶ月もかかり上海にたどり着き、昭和21年、広島のおじさんの家にたどり着きました。昭和28年に父が引き揚げ船で、帰ってくることが新聞にのりました。中学1年生になっていた私は、父が死んでいたと思っていたので、複雑な気持ちで迎えに行きました。父は中国で捕虜になっていたそうです。

以上が子供の頃の一番苦しかった体験です。二度とこのような思いをする人が出ないように、憲法9条を守り平和な日本が続くことを願ってやみません。

富山大空襲について

上田 英二

名古屋市緑区において「戦争体験を語り継ぐ集い」が30年間の長い間、続いていると知ったのは2、3年前でした。昨年、この集いに参加させて頂きました。生まれは富山で7歳まで育ち、名古屋へ来て68歳になりました。戦争と空襲についてはもちろん直接体験はありませんが、今は亡き母親から聞いていた富山の空襲の話は覚えております。

昭和20年8月1日のことです。いや、正確に言えば2日の午前0時頃から始まった米軍の市中焼き尽くし作戦でした。富山市のような田舎の小さな街にも空襲があったのかと思われる方々も多いのではないのでしょうか。市内に不二越の工場があってそこを狙って焼夷弾を落とすのだらうとうわさされていたのですが、死者2700人以上、負傷者7900人、米軍の目標区域の市街地を99.5%を焼き尽くしました。私の母方の祖父母は市内中心部の西大工町に疎開もせず住んでいて、娘（私の母）とこの空襲に被災し祖父母は焼死、母は助かりましたが、煙で目を開けられずその遺体は見ることも出来なかったそうです。遺体は富山市民がみんなそうしたように、親戚のおじさんがリヤカーに載せて、近くの神通川の河川敷地で焼いたということです。

富山に空襲を記録する会が作られたのは1994年で25年前です。会報が204号まで発行されて、今は毎年8月1日前後に追悼の会を会独自で催しております。会員数は150人、対市交渉、「体験を語る会」、小中学校への出前講座、会報、会誌の発行を行っています。

対市交渉は「富山大空襲」の真実に接近する仕事は、富山市の行政上の課題であることを市に受け入れさせることです。具体的には「戦災死者名簿の100%に近づく調査と記録」（他にもあります）です。これについては自分の祖父母の記名が不十分なので今夏までに富山市に申し入れたいと思っています。

＊飛翔より＊

私の昭和は・・・（その１）

夏梅 誠一

私は今年４月で満９７歳になった。数え年で言うなら９８歳で、来年白寿を迎えることになる。「遠くなりけり」の昭和初期を知る人が少なくなった今日、私の昭和をお伝えすることが、昭和・大正・明治の歴史を黒塗りの教科書でしか学ばなかった時代の人々や、日本敗戦前後の歴史を素通りしか教えられなかった人達に「あの時代」の一幕を知っていただければと願ひ、私のささやかな記憶で聞きかじり・思い違いもあるかもしれないが、ここに書き記そうと思う。

私が物心のついたころの我が家は京都市中京区聚楽廻り西町の一角、今でも数多い京町家の一軒だった。

その頃の微かな記憶として、大正天皇崩御を伝える週刊誌（タブロイド版だった）で、冒頭黒枠の頁に胸に大小さまざまな勲章をつけた天皇の写真（当時は御真影と呼んでいた）の大葬の記事が載ったのを見た憶えがあり、天皇崩御の哀悼歌というのか

「地にひれ伏して天地（あめつち）に祈りし誠容れられず・・・」

とか、歌詞と曲の一部を今も憶えており、ハーモニカで吹くことができる。

私たち家族が暮らしていた京町家は、間口２間のうち３分の１が家の奥まで続く「通り庭」になっており、まん中あたりにツルベが下がっている井戸と流しがあった。母は毎日ガラガラとツルベの音をさして水を汲み上げ、それをバケツに移して炊事をしたり、そのまま裏庭の木のタライまで運んで洗濯板で着物をこすりつけ、時には張板に張りつけた着物をほどいて子どもの着替えも縫い上げる。あの頃母は４０歳にもなっていたろうに、黒っぽい木綿の着物で休む暇もなく１日働いていた。

そんな母は、時おり近所のおばさんたちと一緒に裁縫しながらお喋りをしているのが唯一のくつろぎの場であったようだ。母は幼かった私が母親たちが丹波地震について話しているのを聞いて質ねた言葉がおも

しろかったようで、おばさんたちがいるときに、「この子が『いっしんのおはなししたあはんの』とききますねん」とからかった。そして私が家の前の三和土（漆喰を固め、雨水の侵入を防ぐ）に、蠟石を使って専ら東郷元帥の軍服姿などを鼻水すすりすり描いていたら「ウマイウマイ」とかほめてくれるのがうれしかった。

父は京都市役所に勤めていた。中折れ帽子をかぶり、チョビ髭を生やし、決まった時間に家と役所を往復する「月給取りさん」だった。その頃の父は４０歳半ばにも達していなかったが、当時の大人は皆歳以上に老けて見えていたのかもしれない。

父は朝勤めに出かけ帰ってから口数少なく、夏には半ドンという制度で昼から帰ってくることもあったが、帰宅すれば掛け軸にした絵や書画を掛け、文学本並べた本棚が置かれた２階の６畳で好きな書、書画の本や文学書に執心しているか、時には同好の友人を招いて歓談していた。

また、付き合いのあった若手の絵描きさんを招いて書画を描き合うこともあり、そんな時は私も２階へ上げてもらい、彼らが色紙に絵を描く様子を見せてもらった。

私の昭和は・・・（その２）

大正１５年１２月２５日に天皇が亡くなられ。裕仁皇太子が皇位継承、年号は昭和となった。元年はその年の１２月３１日までですぐ昭和２年となり、天皇の即位の儀式・御大典は、喪が明けた１１月に京都御所で挙行されることになった。

それに合わせて記念行事がいくつも企画され、岡崎広場では大礼博覧会、千本丸太町西北角の広場では子ども向けの博覧会が開催されることになった。

それらの準備に、博覧会の会場建設に当たる〇〇組とかのハッピを羽織った職人さんたちが我が家の近所の数軒の借家を作業場にして、材木や資材を運び込んで諸行事の素材作りに忙しく働いていた。この人達に若くて威勢のいいお兄ちゃんて、「だべ言葉」の混じる関東弁で喋っていた。

私たち近所の子どもたちはちょくちょく彼らの仕事場を見に行っていた。ある休み時間に年長の職人が若いもんらに「もう俺みたいにな（甲

種合格)が『軍縮』で(クジ逃れ)になって兵隊行かずに済むなんてことはなくなるだろうな・・・」とか言っているのを聞いて、男は皆兵隊に行くものと思っていた子どもたちは「兵隊に行かん大人もおったんか・・・」と目を丸くした。

そんな兄ちゃんたちが仕事の合間に口ずさんでいた「砂漠に日が落ちて夜となるころ・・・」とか「ハアー・・・島で育てば」などの流行歌を繰り返し歌っているのを、作業を見にいつにいつの間にか覚えてしまった。その人たちが歌う流行歌は大正末期のデモクラシーとそのあとの暗くなる時代を交錯していた頃だったのかもしれない。

いよいよ博覧会が始まった。役所勤めの父に博覧会の職員バスのようなものを持っていたので、私と弟は千本丸太町の子ども会場へ何度も連れて行ってもらった。

この会場で初めて戦車(タンクと呼んでいた)を見た。全身鉄で作られたタンクには頑丈なキャタピラがつき、砲塔には長い機関銃が銃身を出していた。そしてそれを取り囲むように置かれた映画看板さながらの背景を背負ったタンクは本当に煙を上げ突進しているようで「うわあー、すごい！」と胸がワクワクして弟と2人、歓声を上げた。戦車の他にも「複葉機」と言っていた二枚羽の飛行機が2階ぐらいの台の上に飾られており、こんなに間近で飛行機を見るのも初めてだった。複葉はごついテン、地のような布製だったが、実物を目の前でみた弟と私は、ここと戦車だけを行ったり来たりして「わあ」「すごい」とかを繰り返し、他に何が並んでいたのか覚えてもいない。私達2人をそのままにベンチで本を読んでいた父は、興奮する私たちに「何がすごかったんや」と聞いたが、「なにがって・・・」と、2人とも上手くいえなかった。

ある暑い夏に1日。半ドンで昼過ぎに帰ってきた父を訪ねて、浴衣がけに麦わら帽子をかぶったおじさんが大きな西瓜を抱え、やってきた。父のところにちょくちょくやって来る画家の菅谷桂岳さんだった。「コレ、ボンちゃんらと一緒に食べてもらおうと・・・」母に網に入れたスイカを差し出した。母は嬉しそうに何度も礼を述べ、早速井戸に入れてそれをひやした。冷たくなったころ、ちゃぶ台の前でツバを呑み込んでいる私たち兄弟に、桂岳さんが「これはボンたちのおみやげや」大きな切り身を差し出してくれたのが嬉しかった。

父が残した掛け軸のなかに、桂岳さんから父へのためがき軸がある。幼子を抱き、右手で腕を支えた托鉢僧が描かれたその掛け軸は、時折床の

間に掛けられていたが、八方にらみのその目が小さいときの私には気味悪くみえた。いつか母にそのことを聞いたとき「あんたの兄ちゃんが疫病にかかって亡くなったんで、お父さんが桂岳さんに描いてもらわった」と教えてくれた。

そんな時代ことをとりとめなく思い出す・・・。



＊故橋詰四郎さん追悼に寄せて＊

橋詰四郎さんはシベリア抑留とシベリア帰還兵という体験から、その後の人生に大きな痛みを抱えて生きてこられました。その痛みが「絶対に戦争を起こしてはならない、世界から戦争をなくさなくてはならない」という強い思いになり、大変な労力と気力を持って、平成の時代30年間で「戦争体験を語り継ぐ集い」を支え続けてこられた方です。平成の時代が終わりを告げる今年、帰天されました。ご冥福をお祈りするとともに、哀悼の意を込めて、活動の一端をご紹介しますいただきます。

橋詰四郎さんと私のこと

水野 晴仁

橋詰さんと私の年齢差はちょうど40。私の祖母が、大正15年生まれで、橋詰さんとは同学年。橋詰さんと初めてお会いした時以来、私は橋詰さんを自分のお爺ちゃんのように慕ってきました。橋詰さんも私を孫のようにかわいがって下さいました。

橋詰さんとの出会いは、多分、私が生まれる前から計画された「予定通り」のものであったような気がします。それは私が勤めていた会社を退職し、40歳で小学校の教員採用試験に合格した年。この合格を、私はある人にどうしても報告したいと思いました。私が教職を目指すきっかけになった恩師のS先生です。S先生とは20年ぶりの再会。59歳になられたS先生から「末期癌なんだ。あと3月ほどの命だ」という告白を受けました。病床のS先生は、最後の気力を振り絞り「諸輪の歴史散歩」という本を執筆されていました。この本の最終章は、S先生の生徒らによる「祖父母たちの戦争体験」という文集で、その先頭に、橋詰さんのお孫さんの文章が入っていました。平和教育の実践中、S先生は橋詰さんから多大な支援を受けられたようで、編集後記には橋詰さんへの謝辞が記されていました。完成した本を橋詰さんに手渡したいというS先生を、私が車で橋詰さん宅に送迎した日が、橋詰さんと私との「運命の出会い」の日だったのです。その日S先生は「晴仁君は私の後継者です」と私を紹介されました。この短い言葉で、橋詰さんはすべてを悟

り、私も自分の役割を不思議と理解していました。3人が揃ったのは、この日が最初で最後でした。

この日から7年の歳月をかけ、橋詰さんと私は、平和教育教材「シベリア抑留と満州棄民」を作り上げることになります。私は、橋詰さんが生涯をかけて作ってこられた戦争体験者の証言集と種々の歴史資料のすべてを受け取り、漏らすことなく目を通し、不明点を一つ一つ橋詰さんに確認し、約50名の戦争体験を、600以上の写真やイラストを用いてわかりやすく解説・編集した500ページもの大作です。視力の衰えが激しい橋詰さんはルーペを用いて全ページに目を通され、次々に補足の資料を提供して下さいました。二人の執念が結実したこの作品は新聞紙上で広く紹介されて講演依頼が殺到。橋詰さんを車に乗せて、二人でどこにでも出かけていきました。これまでに2,000名以上の方々が受講されました。

橋詰さんは亡くなりましたが、私は寂しさを感じません。それは橋詰さんの魂が、私と一体になっているからです。橋詰さんの記憶は、私の記憶となりました。橋詰さんのいない夏…。今年も各所から講演依頼がありました。私もまた生涯をかけて橋詰さんの「平和への思い」を若い世代に伝えていきます。橋詰さん、私の背中にしがみついて、その様子を見守ってください。がんばります！

フリー・スタイル・スクール ミズニーランド（水野塾）代表

水野 晴仁

※「シベリア抑留と満州棄民」は、次のページに掲載されています。

<http://www.mizneyland.com/about-war.html>



編集後記

新しい元号、令和を迎えました。新しい時代の日本が向かう先が平和でありますように、願いを込めています。

6月中旬、海外からは日本の海運業者が運航するタンカーが攻撃されるというショッキングなニュースが飛び込んできました。「どこの国が攻撃したのか？」様々な議論と共に、犯人探しも始まります。なぜ攻撃せざるを得なかったのでしょうか・・・もし、犠牲者が出たとしたら、明らかな憎しみが生まれます。戦争の小さな種はこんなところから芽を出し始めるのかもしれない。

ほとんどの人たちが、戦争を望まないことは明らかなのに、なぜでしょう？

また、国内では身近な名古屋市内で、不発弾が見つかりました。撤去のために1時間前から避難誘導、30分前からは交通規制、地下鉄や市バスも運休や迂回運航になり、避難対象区域に住む市民は3,384人とのことでした。戦後70年以上を経てもなお、私たちの日常に戦争の影響は及んでいます。

戦争を遠く離れた国のことではなく自分のこととして考えていきましょう。ちまたの事件や出来事を、客観的で多様な視点から捉えることも大切なのではないのでしょうか。私たちの心の中の平穏は、現実世界の平和へと反映していくことでしょう。さまざまなところから平和へとつなげていきたいものです。

戦時体験記録集を後世へ残すという一年一年の積み重ねを今後も続けていきます。この記録集を通じて、折に触れ平和を愛する心を育む機会としてご覧いただければ、幸いに存じます。

地域の皆さまへ、そこから広く社会へとつながることを祈ります。日本の未来が優しく穏やかなものでありますよう願います。



第31回 戦争体験を語り継ぐ集い

令和元年7月27日開催 戦争体験を語り継ぐ集い実行委員会

この冊子は古紙パルプを含む再生紙を使用しています